
淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

酒呑シゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

【Nコード】

N5619Y

【作者名】

酒呑シゲ

【あらすじ】

淫魔。すなわち人の精を糧とする淫の悪魔。しかし、何事にも例外はある。淫乱ではない淑女な淫魔エリザベス。彼女の苦悩は、先駆者に似た物である。

Opening

こんばんは。毎度お馴染み『淫魔』です。今日は皆さんに少し話したいことがあります。この場をお借りさせていただきました。

我々『淫魔』という種族は、人間の精を絞りつくし、それを糧とする悪魔と世間では評されていますね。現代においても、その風評は変わりありません。そのことです。そのことについて私は話したいのです。

私は『淫魔』としてこの世に生を受け、78年の若輩者であります。しかし、私はいまだに人間の男性に対して、その……何と言えばよいのでしょうか。夜に男性のいる部屋に忍び込む。つまり夜這いして襲う……性的な意味で取って頂いて構いません。

とにかく、私はそういった行為をしたことはありません。

というか『淫魔』という種族だけでなく、魔界を歩いている私に色目を使ったり、蔑むような視線で見られるのは、正直心が痛みます。私も女です。容姿に関しては『淫魔』という種族の特性から……自分で言うのはお恥ずかしいのですが、客観的に見れば見目麗しいものだと思います。そのせいか前述したようなお方が、多くお節介をお掛けになられます。時代は変わります。淫魔も変わります。淫魔たちが全て私のような考えを持っているわけでありません。私とは真逆の性格で快樂主義者である方もいますし、むしろそちらが多数です。

ですが、私は違います。種族の特性のせいで、時には発情したりもします。ですが、そんな時も私は己を見失いません。

その結果、私はいまだに純潔を死守しています。殿方とお付き合いましたことも一切ありません。ですが私は、自分自身に誇りを持つ

ています、胸を張れます。

だからマジで私の事を淫乱な悪魔だとか、はしたない女だとか、それに準ずる見方をしたいでください、マジで。マジを二回使いましたよ。これがどういう意味かわかりますか？

そう、とても重要なんです。

申し訳ありません。少々熱くなってしまいました。だって女の子だもん。失礼、涙は出ていませんでした。

とにかく私は、淫魔の不当な扱いに反対します。時代は変わったんです。

あ、自己紹介が遅れましたね。エリザベス・ラトウプーティンと申します。

Opning(後書き)

ちよつと前に書いたやつです。

単発なので、更新はしないかなーと思います。

もし需要率が高ければ更新するかもですww

就職決定！（前書き）

感想を頂いたので、続きを書かせていただきました。

何分、プロットなども作っていないので至らぬ点多々あるかも知れませんが。

どうか生暖かい目でスルーまたは『ここはこうだろ！シゲのハゲ！』
と言ってもらったら踊ります！

就職決定！

エリザベスは今日も魔界の街を歩く。他の淫魔たちのように、周囲の悪魔たちを誘惑するように、腰を基点にした淫猥な歩き方ではない。軸のぶれない、凜とした歩調である。

一風変わった淫魔に悪魔たちは奇異の視線を向ける。男を引き寄せるフェロモンを周囲に放つてもいないし、桜色の柔肌を露出させるような服も着てもない。彼女の視線、歩調、身なり、全てが淫魔とはかけ離れていた。

彼女が淫魔であることが分かるのは、剣先のように尖った耳、背中から生えた黒翼。No Life Kingの血族を示す紅色の瞳、そしてその内に煌々と輝く高貴さ。整った容姿。姿形は淫魔そのものであったが、その行動や格好は『淫魔』とは大きくかけ離れたものだった。

ギャップ……それに限るだろう、彼女が他の淫魔よりも男悪魔に言い寄られる理由は。彼女にとってそれは迷惑極まりないものである。

『どうせ淫魔なんだし、そんな身なりしてても誘ってるだけなんだろう？』

こんな事を言われた日には、ぶん殴ってやりたいと思うのも仕方が無いだろう。

だがしかし。淫魔エリザベスにとっては、それらが日常茶飯事なのだが。

鮮血のように紅い瞳。腰まで届く桃色の髪。身長は他の淫魔に比べると低めの150cmと少し。

これが客観的に見た私の容姿です。

種族の特性故に、どう鼻屑目に見ても万人が振り向く美貌なんでしょう。顔も他の淫魔と違って、幼い印象を受けるかも知れませんが、ようは童顔というやつでしょう。人間の歳で言うなら16、17歳くらいです、身長のせいで、まだ低く見えるかもしれませんが。対して他の淫魔は20歳半ばと、妖艶ななまめかしさを感じる見た目です。

淫魔に生まれたことを後悔しているわけでも、卑下するわけでもありません。ですが、しつかりと『淑女』らしさをモットーとする私としては、辛いと思うこともあります。

前置きが長くなりました。どうも、淫魔のエリザベスでございませぬ。愚痴ばかりしていて、ストレスでしわが出来ないかが不安になる今日この頃です。

今、私は街を歩いていきます。目的はある建物に行くことです。

『職業安定所』みたいなもので、魔界の住人達のそれぞれの種族あつた職業を紹介してくれたりする場所です。先日まで、私はバイトでレストランのウェイトレスをやっていました。だけど、接客中にあまりにもセクハラ紛いな事をされるので、今朝方店長に辞表をお渡ししてきたのです。

働かざる者食うべからず。

ということ、仕事を探しに行くのです。そもそも一人暮らしなので、お金が無いと路頭に迷うことになってしまふのですが。

余談ですが、『淫魔』には親家族と言った概念がありません。初

代魔王の眷属である我々『淫魔』は、自然に生まれるのです。そう、それはもうポンツと。生まれた時には、既に自我というものがあり、自身を認識しています。

他の悪魔、魔物は生殖行為によって繁殖するものが多いのですが、『淫魔』は悪魔や魔物とは規格外なのです。

生殖目的じゃ無いなら、なぜ『淫魔』が人間の精を求めるのかと
いうと、それは自らの欲望に従ってるだけでしょう。私は違います、
そんなことしませんよ？

更に余談ですが、『淫魔』が子を宿せないというわけではありません。
せん。

閑話休題。

「こんにちは！」

やたらと豪華な外装内装をした『職業安定所』……別名『悪魔協会』に入った私の第一声でした。挨拶は大切です。第一印象が相手とのこれからの関係を左右するともいいますから。

私は挨拶を済ますと、受付のお姉さんの元へ慣れた足取りで向かいます。

「またセクハラですか？」

「はい……」

「まあ、気を落とさずに……良い仕事見付かるといいわね、手伝いますよ」

初対面ではありませんでした。この人は受付のお姉さんこと吸血鬼の『ツェペルさん』。肩くらいまでのセミロングヘアで、瞳の色は私と同じ紅色です。まあ、私よりも少し薄いですが。

理由は、ツェペルさんが吸血鬼だからです。吸血鬼も初代魔王の眷属で、私と気が合うのもそれが理由かも知れません。本来高貴で、魔界でも貴族が殆どの吸血鬼が何故こんな場所で働いているのかというと、勘当されたらしいです。

親に政略結婚の種にされるのが嫌だったそうです。半ば家出の形だったと聞くので、実際は勘当されていないのかもしれませんが。

「ありがとうございますー、ツェペルさんー」

「気にしないで……少し気持ちもわかるわ」

そう言って、優しく微笑みながら私の頭を撫でてくれるツェペルさん。敬愛させていただきます姉様。

「今回は、エリーに良さそうな仕事もあるわよ？」

「本当ですか?!」

エリーというのは私の愛称みたいなものです。

「ええ、そろそろ来る頃と思ってキープしてるわ」

「うう……ありがとうございますツェペル姉様……」

「誰が姉様だ。はい、これ」

ツェペルさんの優しさにむせび泣く私に、一枚の紙を見せてくれる。なにになに……？

「『人間界視察』？」

「ええ、簡単に言えば……人間界に言つて、各国の戦力を含む情勢、政権、財政、経済など、諸々の記録をまとめる仕事よ。本来はエリート悪魔じゃないと出来ないんだけど、私が推薦状を書けばイケるだろうと思つわ、どうする？」

「各国つて、結構忙しいのでは……？ 私なんかに務まるでしょうか……？」

つい不安になってしまいます。というか推薦状つて、やっぱりツエperlさんつてすごい貴族なのでしょうが。

「あー、ごめんね。各国つてのは語弊ね。一人につき一国。それに記録つて言つても、国の内部に忍び込んで捕まったら、それこそ元も子もない。だから、自分の感じるように書けば大丈夫。それにエリーつてすぐ仕事変わるけど、有能だしね？」

説明を付け加えるツエperlさん。

「なるほど……」

そう言われると少々悩みます。ツエperlさんがこのお仕事を紹介してくれたのは、きっと人間界なら私を淫魔と知る者が居ないから容姿から注目されることはあつても、今のようにセクハラ、時たまある実力を以つてしたセクハラからも解放される……。

となると、後の問題は……。

「現地でのお金なんかはどうなるんでしょうか？」

「支給されるわ。でも最低限で家賃に食費、後は少しの行動費くらいね」

「お給料などの支払いは、魔界の貨幣でしょうか？」

「それは指定ね。人間界……国ごとの貨幣での支払いも出来るし、

私たちの国のでもオツケー。あ、言っとくけど、給料はかなり良いわよ？ 一応国の仕事だからね」

「……やります！ やらせてください！」

「そう言うと思った。じゃあ、登録用の書類持って来るから待ってね？」

私にそう告げると、カウンターの奥へと下がっていった。良い仕事を見つけてました。人間界にも、前々から興味はありましたし、良い機会ですね。

同じ淫魔の人達からは嫌われてるし、友達とかはツエperlさん以外には居ない……何も思い残すことはないです！ あれどうしてでしょう、涙腺からソルトウォーターが……

「何泣いてるのあなた？」

「いえ、何でもありませんよ……！ ただ、自分の友人関係とコミュニケーション能力に一抹の不安を抱いていただけです……ふふっ」

「……まあいい。はい、これの必須項目に記入お願い。期間は6ヶ月からで、以降は希望で延長できるわ。面接はあるはずだけど、わたしの推薦状あるし無しだと思っ」

サラツと言って除けるけど、やっぱりすごい人です。名前、生年月日、現住所、種族、家柄。必須項目を一通り書き終わると、紙をツエperlさんに渡す。

「はい、確かに確認しました。人間界への出発は三日後になりますので、当日の朝9時に『第一層のポータル』にて集合です。場所は解りますか？」

やはり最後はいつも営業用の口調に戻ります。本人曰く、しっかりするところはするらしいです。

「はい、大丈夫です」

「ん、じゃあ今度こそ頑張ってるね！」

「はい……本当に今までありがとうございました……」

今までご迷惑ばかりかけて、感謝しても感謝仕切れません。

「な、なに辛気臭い顔してるの！ 別に今生の別れてわけでも無いでしょ！ ほら、私の魔電番号……何か困ったら連絡しなさい」

赤くした顔を隠すようにそっぽを向いて、私に魔電番号（自分の魔力を利用した通信技術）が書かれた紙を渡してくれるツエperlさん。

「うう……ツエperl姉さああん……！」

「うわ、なにマジ泣きしてるのっ！」

「だってえ。い、今まで人と交換したことなんか無かったんですもん……わああん……！」

泣きそうになっていたのに、思わず声を出して泣き出してしまいました。

「ああもう！ 分かったから……！」

「す、すいません……じゃあ、また寂しくなったら電話します……」「寂しくなったらって……」

や、やっぱり駄目ですよ……用事も無いのに電話したら迷惑なだけですよね。それに、私なんかから電話が来たら……きつと……

「あー……勤務中以外の夜なら電話しなさいよ。ち、ちよっとくら

いなら付き合っただげるわよ……」

また顔を赤らめて言うツェペルさん。やっぱり優しい方です……こんな私にも優しく接してくれるなんて。

「ありがとうございます……！　ありがとう」

「べ、別にエリーのためじゃないってば！　暇潰しついでよ、じゃなかったらエリーなんかと」

そう、ですよ……やっぱり私なんて

「くううう……って言うのは冗談でー！　ほ、本当はエリーと話したいなー！」

「ほ、本当ですか！」

「ほ、本当当っ！　……何なのこの可愛い生物は……虐めたいのに虐めたら罪悪感が……これが、これが妹を持つ姉の気持ち……！」

「え、え、何ですか？！」

なにかボソツと言ったツェペルさん。何て言ったのか聞き取れなかったですが、何だったのでしょうか。

「な、何でもないわよ。ほら、準備とかあるでしょ？　もう帰って準備しなさい！」

「は、はい！　それでは、本当にありがとうございましたっ！」

腰を折って丁寧にお礼をして、出口へと向かう。最後に振り返ると、ツェペルさんが手を降ってくれていました。ので、それに笑って返すと、何故か顔を赤らめてそっぽを向いてしまいました。

「……………？」

ともかく、お仕事が決まったことですし、今日は家に帰って準備をしないといけませんね。

うー、頑張るぞ！

就職決定！（後書き）

評価、感想はシゲの原動力となっています。

別連載の『今宵も一献 八百万屋朱顛』も、よろしければ是非是非
ご覧ください！

天罰？

どうも、淫魔のエリザベスです。今日は人間界へ行く日で、昨日の夜から楽しみで仕方ありません。もうストレスでしわの発生を心配していた自分なんてどこにも居ません。

朝9時に『第一ポータル』前に集合とのことなので、今は歩いて向かっている所です。

『ポータル』というのは魔界における転送手段の一つです。魔界にある第一から第八十八までの『ポータル』は相互移動が可能で、人間界にも『中継ポータル』と呼ばれる、『ポータル』の子機のようなものが存在します。今回のお仕事では、『第一ポータル』から人間界の子機ポータルへと飛び、視察対象の国に予め用意されている家に向かうのが、最初の目的となります。

「こんにちは！」

「ん、ああ……君がツエペルが紹介してくれた子かい？」

「は、はい……よろしくお願ひします！」

ポータルの前で黙々と準備をしていたのは、一見すると人と変わらない姿の渋いおじさんでした。一般的に完全な人型に変化できる悪魔は、高位の存在か、強い魔力を持っている実力者の方です。おそらく、彼もそれに当てはまるのでしょう。あごに蓄えた銀色のお髭と、鋭い目がこれまた恰好いいです。高い背丈なので、思わず気圧されてしまいました。

「まあ、時間もなししパツパと行くか。事前に資料は読んできているな？」

「はい、大方把握しました！」

五回読み直しました。

「よし、じゃあ転送するぞ……ちょっと待った、お前は人型にはなれないのか？」

「あ、申し訳ありません……」

つい緊張して忘れていました。背中の羽をしまい、尖った耳を人間のよう丸みをもたせる。

「うむ、出来ないなら不味いことになったぞ。瞳の色は変えられないのか？」

「あ、目の色は出来ないんです……色を薄める程度ならば出来るんですが……」

「ま、無理ならいいさ、そこまで気にすることでもない」

瞳の色に関しては、魔王の眷族であることの強い現れなのです。

薄めることは出来ても、別の色にすることは出来ません。

おじさんは素っ気なく会話を打ち切ると、背後のポータル（形状は球体で、直径1mほど）をいじり始める。

「人間界は初めてなんだったな……」

「あ、はい！」

「……向こうでは、悪魔と思われる様な言動は慎むようにしろ。それにお前は淫魔だろう？ 悪ければ金持ち貴族の慰み物にされる可能性もある。淫魔との『行為』は、まさに天にも昇るような快感と聞くしな……どうした、顔を青くしたり赤くしたり？」

「い、いえ……緊張しているだけです。」ご忠告ありがとうございます

『ん、まあ頑張れ』と言うと、またポータルを操作する作業に戻った。どうやら素っ気ないのではなく、これがおじさんの素のようです。

「ご忠告は痛み入るのですが、楽しみよりも緊張の度合いが大きくなってしまいました。慰み物というのはつまり、人間の性の捌け口にされということですよね……そんな歪んだ形で、今まで守り抜いた純潔を散らすなんて、死んでも嫌です。これまで通り、淫魔とは思われないよう毅然とした態度で挑むことにしましょう。」

「よし。準備が出来た、この魔法陣の中心部に立て」

私はおじさんの言われるがままに、地面で青く薄光する魔法陣の中心に立ちました。

「もう一度確認だ。転送される先は森の中だ。」

お前が視察する国の場所は、予め渡した資料の中に書かれていたはずだ。国の内部には、この通行証を渡せば入国出来る」

そう言って、私の顔写真が印刷された通行証を差し出すおじさんの年齢は16歳になっていました。

「それでは、健闘を祈る……！」

どうも、淫魔のエリザベスです。

今、私は転送魔法によって、移送空間の中で優雅な旅行気分です。漂っています。移送空間と言っても移動している感覚は無く、暖かい粘膜に包まれている感覚だけがあります。周囲は真っ白い空間で、遠近の認識は難しいです、というかわかりません。到着が近ければ分かることなので、気長に待つことにします。

「およ……？」

どうやら、待つ時間もそう長くなさそうです。辺りの白色に灰色が混ざりはじめています。これが到着の合図ということなのでしょう。空間にノイズのようなものが走ったりして、少し気味が悪いですが……

ピシピシと空間にヒビが入り始め、ヒビから光が差し込み始め……パリンと、小さな破裂音が響く。

「え……」

暖かい粘膜の庇護が、突如として消えた。今は凍てつくような風が私の肌を刺している。

冷氣と強烈な浮遊感に、思わず閉じていた目を開く。

「な、な……どうして空に?!」

腐っても行為の悪魔、いや腐ってませんただの比喩です。咄嗟に重力操作の魔法を自身に掛ける、浮遊魔法にしようとも思いましたが、浮遊している私が人間に見られる危険性を考えると、恐くてできませんでした。

そして、その選択は間違いになるのですが。

「きゃあ……！」

重力魔法で落下速度が低下していた体が、背の高い木に突っ込んでしまふ。完全に失態です、咄嗟の判断で注意が散漫になっていました。

無論。太い木の枝や、剣のように細い枝に体を打たれ刺される。

「う……が……」

体中に打ち身や裂傷が走る。人の姿で、身にまとう魔力も人間並みにしていたせいで、傷が次々出来る。

痛みのせいで、既に魔法は中断されている。

そして突如、一層強い衝撃が、私の細身に響き渡る。

「つつ……から、だ……が……」

動かない。鈍痛と鋭い痛みが交互に、そして小刻みに到来する。

少しきつい、かなりきついです。

治癒の魔法を唱えようにも、痛みで集中も出来ませんし、それ以前に体が動きません。

段々と意識が朦朧とし、仰向けになった私を焼こうとする太陽が目に入る。

「眩し、いですよ……太陽さん……」

やっぱり、私たちのような闇の隠れ人は太陽に嫌われているのでしょうか……そもそも、どうしてこんなことに……？

『ポータル』の指定ミス？ いや、子機の元に転送されたのだから、それは無いはずです。きつと、何かのバグでしょう、先程の移送空間でもノイズが走ったりと、色々可笑しい点も見られましたし。

きつと、バチが当たったんでしよう。こんな良い仕事に尻尾を振って食らいついたから。そんなふしだらで非淑女な行為をしたことバチがあたったんですね。

「はは……痛い、な……」

そろそろ、本格的に意識の灯が掻き消えそうです。

私を照らしていた太陽も消えて、木陰に移動したような感覚すらします。

あれ……どうしてでしょう、仰向けだったはずなのに、何かにもたれているような感じがします。

「大丈夫か……？　おい……意識はあるか……?!」

イケないイケない……とうとう幻聴と幻覚まで……目の前に霞んだ人間の姿が見えます……

寝ましよう、疲れました。

きつと、このまま眠ったら……いつも通りに……

天罰？（後書き）

短いですが、更新です。

面白いなー。と思ったら、[ここ](#)感想やお気に入り登録してもらえると、
励みになります！

最初の出会い（前書き）

連日更新頑張りますよう。

最初の出会い

「 う、うん……」

体の節々が痛い。四肢に力を入れども、全く動こうともしない。まるで自分の体じゃ無いみたいです。

「ここは……何処でしょう?」

今現在、私は仰向けになっている。ただし視界に入るのは、気を失う前に見た太陽さんではなく木目の天井です。どうやらここは家内ようです。そして私はベッドに仰向けでいます。そして

「ふ、服を着ていない……?!」

いえ、正確には上にシャツを着ています。はい、『上』には。下半身には履いていたスカートはおろか、下着すら穿いていない。ここから導かれる答えは……

「け、汚された……78年間守ってきた私の誇りが……」

駄目です、冷静になりましょう。それらしき『痛み』は感じません! きつと大丈夫です、信じるのです。自分を。でも、ならここは何処なのでしょう?

「あ、私の服と鞆が……」

体の中で唯一動く首を動かした私の目に入ったのは、机の上で綺麗に畳まれている、私の服と鞆でした。だけど鞆は無事ですが、服

は所々ほつれて穴だらけ、見る影もありません。

「そうでした……転送に失敗して、樹に突っ込んでしまったんですね、ああなってしまうのも当たり前ですね。でも、あれだけポロポロだと、もう着れないでしょうね……」

気に入っていた服でしたのに、残念です。いえ、今重要なのはそこではありませんね、ここが何処なのか、ということですよ。

私が思考を巡らしていると『ガチャ』と、扉が開いた音が部屋に響いた。

「目が覚めた？」

「え……？」

首の稼動域の限界に挑み、音の方へ視線を向けると、男性が立っていた。見た目180？はありそうな男性です。

「あ、あなたは……？」

「そんなに警戒しないでくれ。何もしてない、服の着替えも女性にやらせた」

私の未知の者に恐怖する視線に気付いたのか、男性は手を上に上げて、私の気を楽しにさせる言葉を放つ。男性への警戒は怠らずに、状況を見る。

男性の口ぶりから、ここは彼の家。部屋の広さや、高価そうな装飾品から見るに、財力のある人間なのかもしれない。男性の見た目は、癖つ毛のある耳くらいまでのショートヘア。髪と同じ、金色の瞳。そして中々に整った顔。甘い言葉でも囁けば、女なんぞイチコロって顔しやがってます。

言っときますが、私はそんなことでなびきませんよ！

「俺はレイライト。レイライト＝リライブル。大層な名前だろう？
レイと呼んでくれればいい」
「……エリザベスと言います」

気安く自己紹介を始めるレイという青年。顔には親しげな笑みを浮かべていますが、油断は禁物です。しかし名乗られたからには、こちらも返さねばなりません。礼儀は大切です。

「そうか、よろしくエリザベス。いきなりでなんだが、お前『悪魔』
だろ」

「……う、え？」
「隠すな。その鮮血の深紅の瞳……人型に変化しているようだが……
な？」

穏やかな笑みを浮かべていたレイ青年の表情が、途端に猛禽類を思わせる獰猛な笑みに変わる。ポータルのおじさんの言っていた意味が分かりました。人間にとって悪魔とは、魔王に属する軍勢の一員。つまり人間界では私は敵なんだ。

「ど、うして……？」
「確かに、一般人では分からないだろう。ただ、俺はその手の気配には聡いんでな……？」

答える悪魔よ、何が目的で人間の住む地へ降り立った？
「それは、言えません……」

同じ種族には嫌われ迫害され、魔物や悪魔には『淫魔』というだけ
けで言い寄られ……それでも、自分の故郷や友達ツェヘルさんが傷付くのに協力
するなんて出来ません。

「言えません……！ 幸い私は動けません……姿も人型ですから、殺すのは赤子の手を捻るよりも簡単でしょう。どちらにしろ、口を割るつもりはありません！」

仰向けのまま、レイに出来る限りの強がりを見線に込めて言い放った。

「……ふむ、意外だな」

しかしレイは、それに気圧された風もなく、意外そうに私を眺めた。

「お前は淫魔だろう？ てっきり、俺を誘惑でもして逃げる算段を立てていると思ったがな？」

「そ、そんな節操の無いことをするわけがないでしょう！ 私がそんなにふしだらな女に見えますか?!」

「え……ああ、すま……ん？」

失礼なことこの上ないです。思わず叫んでしまいました。

「淫魔というだけで、そんな目で見られるのが嫌でこちらに来たのに、結局変わりのないのですね……」

「お前、エリザベスと言ったか……淫魔ではないのか？」

「体の一片、心の一欠けらまで、余すことなく淫魔です。ただし、そこいらにいる尻の軽い淫魔とは一緒にしないでもらいたいです！」

ああ、思えばこの78年間、苦心し続ける人生でした。ツエペルさん、一度も連絡出来なかったですが、生まれ変わったらまた仲良くしてくださいね……

「いや、失礼した」

「……何がですか？」

不意に、レイが頭を下げる。

「人を見掛けで判断するな。という言葉が我等人間にはあるが、聞きかじった知識のみで悪魔を知った気でいた私の愚直さに呆れた。

エリザベスとやら、お前を淫魔というだけで誇りを傷付けるような発言をしたこと。この非礼を詫びよう、すまなかった。

そして試すような結果になってしまったが、俺はお前が何を目的に人間界に来たのかは知っている。すまないが鞆の中にあつた書類を読ませてもらった」

「な……どうして人間に悪魔の文字が読めたのです！」

「なに、職業柄で悪魔についてはよく調べるのでな」

軽く言つて除けるレイ。人間というのは、誰かも彼もこのようなのばかりなんでしょうか。

謝られたことに関しては、少し嬉しかったのは内緒です。

「ようはお前の目的は、人間観察というやつだろう。ここ数百年は魔の王も人間の地に踏み入って、自ら戦を仕掛けることも無い。実際のところは知らぬがな……もしも、お前が自らの誇りを賭けて『人間の地を蹂躪する』ことが目的ではないというなら、見逃しても良い」

「……………」

正直なところ、このレイという青年の考えが分かりません。てつきり、人間は悪魔を毛嫌いして、見れば切り掛かるぐらいのものだと思っていました。

しかし、レイに提示されたこの条件……『人間界視察』という仕

事の書類を見る限りでは、戦争行動を感じさせる内容は無かったです。

「さあ、答える」

「……分からないのです。書類には戦争する目的のことなんて書いてないけど、本当は分からないんです……！ だって、だって私はただのバイトみたいなものでやっただけなんですもん！

それなのにあなたは、『誇りを賭けて』なんて……どう答えれば良いか分からないです……」

「それが事実かも分からない。答えることが出来ぬのなら……」

そう言って、腰に帯刀した刀剣を僅かに抜く。

「……殺すんですか？」

「やむを得ん……」

「……男の人なんていつもそうです。自分の都合が悪くなったら、私をけなすんです、売女と……」。

でも……淫魔に生まれただけで、こんなにも辛いのなら、あるいは死ぬのも良いかもしれんです……ふふ……」

今までを振り返り、これから自らに起こりうる事態を思うと、思わず涙が出た。手を動かすことも出来ないから、とめどなく流れる涙は頬を伝って、枕に染みを作る。人間に恥ずかしい姿を見られた羞恥なんてどうでもいい。このまま死んで、辛いことを忘れられるなら、それも良いかもしれんです。

「普通の女の子に生まれたかったな……」

それを聞くのは、この場にはレイしかいない。なぜそんなことを言ったのかは分からない、思わず口から出たのですから。ただ、咳くと涙が更に流れ、余計に辛くなった。

「人間にこんなことを頼むのは悔しいですが、その剣で一思いに、楽にして頂けませんか……？」

「……………」

目を閉じる。最後に見たのが自分を殺そうとする人間の姿とは、我ながら録な人生を歩みませんでした、歩めませんでした。

「……………止めだ、これでは俺は悪者だ」

目と、生への希望を閉じた私の耳に、そんな言葉が飛び込んで来る。

「種族は違えど、麗おなこしい女子の涙は、どんな大魔術よりも強い魔力を放つものだ。

それに悲しそくに涙流す女の子を斬り殺すことが出来るほど腐っ
ていない」

「な、泣いてなんか……………」

涙を拭おうとしたんですが、如何せん体が言うことを聞いてくれ
ません。

「先程まで散々酷い言葉を吐きたくっていた俺が言えることではな
いが……………その涙に偽りなどないと信じる。」

数々の非礼、再び詫びよう……」

レイはそう言って膝をつくと、剣を柄ごとに自分の前に横たえて、深く頭を下げた。

「申し訳なかった……貴方は我が騎士の誇りを賭け、責任を以って家へと送り届けよう」

「……そんなこと言って、口を滑らさせるつもりでは……？ 私は何も」

「そんな企みはないさ。」

ただ健気な女の子の弱い一面を見て、お前に惹かれた。信じたくなった……どうだ、お前も俺を信じてくれるか？」

一転して、紳士的な口調になったレイ。『騎士の誇り』と言っていたので、この国の騎士様なのでしょうか。

人間に同情されたということでしょうか、一瞬ではあるけれど、自らの人生を無駄とってしまった……今までの自分とそれに連なる人達の行為を泡沫に帰す選択を取ろうとしてしまった……

そんなことでは駄目、私自身に申し訳がたたない。ここは何としても生き永らえるのです。」

「し、信じますっ！ だから殺さないでください……！」

「これって、誰かが俺見たら俺って『美少女を襲う変態』……？ 改めて言うが、殺さない。さっきも言ったろう？ 『お前に惹かれて、信じてみたくなった』ってさ」

不機嫌さを感じる風で言い捨てるレイ。私、何か言いましたでしょうか。あれ……それよりも、

「ひ、惹かれたというのは何ですか……？」

「……言葉通りの意味だ」

「れ、恋愛的な意味ですか?!」

「ダイレクト過ぎるって! もう少し包み隠してやんわりとした表現にしろっ!」

それ以前に、お前が考えてるような意味で言ったわけではない。

それに俺とお前は人間と悪魔、相容れんだろう」

「そ、そうですね……当たり前ですね、失礼しました」

今までこんな言い方で好意を伝えられたことが無かったので、柄にもなく純情少女のように初心になってしまいました。少しだけ嬉しかったです、否定などしませんよ。

「では……送るのは資料に書いてあった家でいいか?」

レイが確認するように聞く。

「いえ、自分で行けるので……大丈夫で、す?」

「ああ、そうだな。お前の体が動くのならばな……?」

「……そうでした」

「まだ眠っているか? 言うておくが、もうそろそろ目をまたぐ時間だぞ?」

「ええ?! そんなに気を失ってたんですか! 急がないと……!」

「まあ、そんなに焦るな。なんなら泊まっていてもいいぞ?」

ニヤリと口角を吊り上げて、悪人面を浮かべるレイ。さっきまでの騎士道精神溢れる紳士然とした彼は何処に行ってしまったのせよ。

それに、いつまでもやられてばかりの私ではありません、たまには仕返しの一つでもしてやらねば、悪魔の面目が立ちません。

「な、なななな、何を言ってるんですかっ！ 早く、早く家に帰してください！」

やはり無理でした。

ちなみに私の本当の家は、現在女性限定という名目で貸家になっています。残念ながら帰っても私の居場所はありません。

「ははは……すまんすまん。お前に冗談が通じんことは分かった、では家まで送ろう」

「分かったのなら止めてください……ね？」

こんな殿方は初めてです。今まで言い寄ってきた男性は、誰も彼も非紳士的な方ばかりでしたし、礼儀などありませんでしたのに。目の前にいるこのレイという青年は、紳士的な男性かと思えば、人の事を（悪魔の事を）からかいます。それも下的なニュアンスを含んだからかいです、これでは淫魔の名折れです。

「では、ほれ……」

レイはそう言うと、私に背を向けて腰を低くして屈みこんだ。

「ほれ……とは？」

「ああそうか。体が全く動かんのだったな、仕方ない」

すると彼は、布団を除けると私の手を取る。あれ、そう言えば今の私は服を……。私が何かを言う前に、レイの顔が瞬く間に赤くなっていく。

「お、お前！ 服くらい着ろ、やはり淫魔かっ！」

「あ、あなたが使用人に指示して脱がしたんじゃないですか、この野郎うづうづ！」

もし私の腕が動いたのなら、彼の頬を引っ叩いてやりたかったです。

最初のお会い（後書き）

ご感想やお気に入りに登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいですよ！

人物紹介：エリザベス

名前：エリザベス Name: Elizabeth

種族：淫魔 Race: Succubus of Pur

e blood

年齢：78歳

淫魔とは、闇夜に紛れて男性から精を絞りつくし、それを自らの糧とする悪魔である。

彼女らにとって身の内に精を溜め込む行為は、成長するための手段である。そして、自身らの欲望を満たすための行為の一つである。彼女らにとっては一石二鳥感覚である。

それ故に、淫魔は異常なレベルの快樂主義者が多い。大多数、というか全ての淫魔は例外なく快樂を好む。

また、淫魔は魔界における初代の『魔王』の眷族の末裔である。その身に伝わる純血は現在まで引き継がれている。それを象徴するのが、貴族である淫魔たちだ。現存する淫魔たちは、位や爵位の違いはあれど、ほぼ全ての淫魔が貴族である。

淫魔は子を宿せますが、その子は淫魔として生は受けません。淫魔とは自然に生まれ、生まれた時には既に自我というものがあり、自身を認識している。

つまり淫魔の貴族は一代貴族のようなものだ。しかし、淫魔は欲

望と快樂を追及することで、自然と力を具えて、そして貴族になるのだ。

しかし、何事にも例外は存在するのである。

エリザベスは淫魔でありながら『純血』つまり『処女』だ。彼女は自身の性欲に従うことをよく思わず、本当の意味で好意的に思っていない相手に、己の体に触れさせることを拒んでいる。

しかし、身の内には欲求は蓄積されていく。そのため定期的に動物で言うところの『発情』が起こる。そんな時は家に引き込み、なんとか自身を『慰める』という方法で性欲を押さえている。

いつの日か、彼女が向かわれる日も来るのかもしれない。

身長：155cm 体重：

(文字が塗りつぶされていて

読めない)

人物紹介：エリザベス（後書き）

こんなん作ってみました。

不幸（前書き）

予約投稿の有効活用

不幸

どうも、淫魔のエリザベスです。

最近は……空から木に墜落して体が動かないという事態に陥いました。

それに伴い、初めて出会った人間の男性に捕獲……もとい介抱されてきました。

その後、人間界での私の家に送ってくれると言う話になったのです。

彼は私に背中を『家までの特急だぜ？』と言わんばかりのドヤ顔を晒しやがった後に『あ、体動かないんだったね』とほざきやがりました。

『仕方ない』と世話をかける子供へ向けるような表情をした後に、あるう事かほぼ全裸（シャツ一枚の下着なし）の私の体を隠す掛布団をはがしました。

「お、お前！ 服くらい着ろ、やはり淫魔かつ！」

更に更にあるうことか、私に責任の擦り付けを行使しました。

「あ、あなたが使用人に指示して脱がしたんじゃないですか、この野郎つうつう！」

この場合、怒っていいのは私の方ですよ。

万人が見て、そう思うでしょう。

ですが、体の動かない私には僅かに指を動かす程度の事しか出来ません。

体が動くようになったら、必ず頬を引っ叩いてやります。

「み、みみ見てないで、早く元に戻してくださいっ！」

私に大して『淫魔めえ！』と罵倒したくせに、いつまでも掛布団を手に持ち放心状態でいたレイに、もう泣きそうになりながら叫びます。

心なしか、彼の視線が私の下半身に向いているような気がするのは、きつと自意識過剰な私の眼の錯覚と信じたいです。

「う、ううむ……すまん。いや、なかなか艶めかしい御足をお持ち
ちで　　うぶっ！」

怒りと羞恥の力は偉大です。

私は残された力　すなわち気合　　を使って立ち上がり、
未だに放心状態のムツツリじゃないスケベのレイから掛布団を引
たくり、素早く体に巻いた後に、頬を引っ叩いてやりました。

人型であるため、その力は人間並みであつたのが悔やまれます。

無論、先程の分をあわせて二発です。

今、彼の両頬には綺麗な赤い花が咲いています。

「も、もう少し女性に対する配慮を持つてください、この変態っ！」

「　　つつ……少し太腿を見ただけではないか、打ぶつことは無
いだろっ！」

「貴方は騎士なのでしよう、でしたら紳士然としてくださいっ！」

「騎士であろうと俺も男だ、そして自然と目が行くのも男の性さがだ！」

「開き直らないでくださいっ！」

本当に、先程までの騎士と認めざるを得ない紳士は何処しずかへ行つて
しまったのでしょうか。

あれ……？

「わ、私……立っています！ あっ、とと……」

しかし体のそこら中が痛く、まさしく満身創痍と言った具合です。普通に立っていただけなのに足がガクガクで、つい倒れそうになりました。

「なんだ、立てるんじゃないか」

「ええ……誰か様のおかげです」

「ふ、礼には及ばん」

「皮肉ですよっ！」

私はそう一言残し、荷物の置かれた机へと亀のようにゆっくり歩み寄ります、これ以上のスピードはキャパシティの限界に達します。

「なんだ大丈夫か。手を貸そうか？」

「いいえ、大丈夫です。結構です」

懇切丁寧に、二重に断りを入れます。これ以上彼の手が私に触れる事態は、何としても避けなくは。

「荷物からは何も取っていないんですか？」

「ああ。資料にしても、お前が倒れていた場所で、鞆から飛び出していたから気付いただけだからな。それもちゃんと元に戻している」
「そう……ですか。」

治療に関しては礼を言わせてください、ありがとございました。それでは、失礼します」

お礼は欠かさず、淑女の常識です。

そして、私は再び亀の如く歩みで部屋の出口を目指します。

「あ、おい！ 送っていくと言っただろ？」

「いいえ、これ以上お手を煩わすのもいけませんので」

それだけ言っつて、私は部屋を後にしました。

「大きなお屋敷です。あの人、やはり騎士でもそこそこ偉い方なのでしょうか。まだ若く見えたのですが……」

部屋を出ると、大きな廊下でした。

幸い、出口のある大広間はすぐ近くにあったので、迷わずに済みました。

一つ辛いことがあったのは、二階に居たという事です。階段を下りるのが本当に大変でした……手すりに体重を掛けながら、ゆっくりと降りることで事無きを得ましたが。

「それにしても、夜なのに活気がある街ですね」

屋敷を出て豪華な家　もはや屋敷　が立ち並ぶ通りを抜けると、更に大きな通りに出ました。

人々の喧騒が、夜の暗さを追い払うような光景です。

通りの両側に立ち並ぶ様々な出店、それを楽しそうに見る客たち。

客層もまた様々で、冒険者ばい風貌の方や、恋人たち、遊び人、行商人、果ては家族のような方まで。

途中、現在位置が分からないので、友人たちと歩いていた男の子に聞くと、街の中心にある通りだと分かりました。心なしが男の子の頬が紅潮して、嬉しそうに唇が歪んでいましたのは何故でしょう。

もしや、今の私の服装ののでしょうか？

確かに掛布団を体に巻いただけなので、近くで見れば可笑しく見えるかもしれませんが。

遠目で見ればマントかもしれませんが、確かにこれは笑いものです。

元々着ていた服は破れていますし、仮に破れていなくても屋敷で着替えるのは、恐くて出来ません。

「おう嬢ちゃん、何探してるんだ？」

私が手持ちの地図と睨めっこをしていると、不意に誰かに声を掛けられました。

「……………」

顔を上げると私の数m前で、柄の悪そうな男性が三人で徒党を組んで、私を見ていました。

見るからに小物臭のする方々です。

「夜中にこんな場所歩いてたら、危ない人らに酷い事されちまうぜー？」

「違いねえ、ひっひっひ！」

三人の中心に立つ、一番がたいの良いリーダーらしき男性が言う

と、他の二人が顔を歪めて、厭らしく気持ちの悪い笑い声を出す。

「あなた方には関係ありません、どうぞお構いなく」

「おいおい、それは無いぜえ嬢ちゃん！ ちよっとくらい構ってく
れてもいいじゃねえかー？」

一々構っていられないと判断し無視に徹し、私が隣をすり抜けよ
うとすると、リーダーらしき男性が私の腕を乱暴に掴む。

「　　っ！ 離してください！ 離さないと……！」

力を入れて振り払おうとするけれど、男の手は岩のように固く、
全く動かない。

ただの人間にどうしてこんな力が……？！

動揺しつつも、なんとか身の内の魔力を……素早く操作出来ない。

「あ……」

とんだ馬鹿なことをしていた。

今の私は、殆ど人間と変わらないんです。

腕力は人間の女性にも劣り非力、魔力も常に比べると遥かに劣る。

「なんだなんだあ？ 抵抗するんだったらちよっと乱暴になっちゃ

うよ、お兄ちゃんたち？」

「抵抗しなくても乱暴じゃねーか！」

「ひっひっひい！」

下賤な言葉を吐き出して、再び笑い出す三人組。

なんとかして逃げないと。

「離して！ 人を呼びますよ！」

キツと睨みつけるも、男は厭らしい笑みを浮かべたまま私を見たまま。

「誰か！ 誰か助けてください！」

辺りを見回して声を出すが、誰も居ない。

さつきまでの喧騒が嘘のように静まりかえり、私と男たち以外には、誰もいない。

「当たり前だろ、裏通りなんだからよお？ 通りはあの騒ぎだ、大声で叫んだって誰も気づきやしねーよおー」

「そんな……」

しまった……地図に集中して、全く辺りに警戒していなかった。最悪だ、最悪の落ち度だ。最悪の展開だ。

「もういいだろ、身ぐるみ剥いでここでやっちまおうぜ？」

「かー、相変わらず気が早いやつだな、まあ嫌いじゃないけどな」

仲間の一人がそう言うと、リーダーらしき男の太い手が、私の服

掛布団 を脱がそうとする。

「止めて！ 止めてくださいっ！」

「おいおい、これマントと思ってたらただの毛布じゃないか？」

抵抗の言葉も行動の甲斐も無く、あっさりと服を取られてしまう私。

「って、なんだその格好！ 最初っからその気でここに来たんじゃないのか?!」

「違います！ 私を他の淫魔と一緒に

「あー、分かった分かった。大人しくしろって」

暴れる私の言葉を適当に受け流し、残り一枚になった私のシャツをも剥ぎ取ろうとする。

鼻息が、呼吸が荒く、目も血走っている。

「止めて、誰か助けてっ!」

助けを呼ぶも、その声に応える者は誰もいない。

どうして、どうしてこんなことに……? ?

今までの気分を変えて、誰も私の正体を知らない人間界に来たのに、結局こんな形になるの？

どうして。

淫魔であって、淫魔としての生き方を選ばなかった私には、幸せになる権利なんて……無いの……? ?

「いかに治安の保たれた国であろうと、その陰にはクソ共が蔓延っ

ている。

どんな国だろうと、それは変わらないんだ。

知ってたか

エリザベス？」

「……………え？」

聞き覚えのある声に振り返る。

そこには、黒いズボンに薄い青色のシャツと、ラフな格好をしたレイが居ました。

服装とは対照的に、その手には銀の光を放つ刀剣を持っている。

「おい。んだてめえ、邪魔すんのか?!」

「邪魔とは人聞きの悪い……………その女は俺と先約だ」

ゆっくり一歩踏み出し、私の方へ近づいてくるレイさん。

その一歩は余りにも優雅で、空から差し込む月明かりで幻想的にすら見えた。

「なんだ？ やろつてのか？ おい！」

リーダーらしき男性が仲間にも声を掛けると、二人の仲間は一つ頷いて、腰にそなえた短剣を取り出してレイに飛び掛かった。

「はあ……………これも仕事って考えるか……………」

しかしレイは臆することなく歩を止めず、ため息を付いて余裕すらあるように見えます。

「つち、嘗めやがつ

」

「はあ？」

「

背後のリーダーらしき男性が、素頓狂な声を漏らす。
それもそのはずで、動きらしき動きを見えないレイを前に、二人の仲間が倒れたのですから。

人型であるせいで動体視力が低下してるとは言え、私にも銀の線が空を裂いたのしか見えませんでした。

「おい、そこのお前。今すぐ消えろ、五秒以内に消えなかったら本当に殺す」

レイがリーダーらしき男に冷たく言い放つと、私の腕が離して仲間の事など放って、素晴らしい逃げ足を披露して去って行った。

定番の言葉すら言わずに逃げるとは、小物の中の小物です。

「エリザベス」

「……あ、はい！」

「お前の住むはずの家はな……もの国でも治安の悪い場所に位置する。」

こんな奴らがそこいらにうつろっている様な場所にな」

言ってレイは地面に転がる二人を蹴る。

「だからこそ、体の動かんお前を送ってやろうと思ったのに、これだ……」

「すみません……」

「何が手を煩わせたくないだ、余計に面倒かけやがって」

「すみま、せん……」

「あーもう、すぐ泣くな」

「っつ、泣いてません……！」

緊張の糸が切れ、油断して涙腺から水滴が少しこぼれました。
こんな短時間で、しかも同じ男性に涙を見られるなんて、恥ずかしくてたまりません……

「ありがとうございます……」

「……まあ気にするな。もうすぐそこだろう、今度こそ送っていくからな」

「ありがとうございます……」

地面に座り込んでいたので、立ち上がるうとするが、足に力が入りません。

無理が祟ったのかもしれない。

「すみません……ちょっと、待って……」

再度力を入れようとするが、立てない。

「あれ、可笑しいな……あっ」

隣で見ていたレイが見兼ねたのか、私の手を持って抱き上げる。
俗語で言えば『お姫様抱っこ』の状態です。

事前に掛布団を体にかけるといって、紳士スキルを再発動するのも忘れていませんでした。

「見てもらえない。お前本当に淫魔か？ 高位の悪魔か？」

「……すみません……」

からかわれるも、返す言葉もなく謝ることしか出来ませんでした。

「……急にしおらしくなりやがって……」

そう言うと、レイはそれっきり黙ってしまいました。

私も顔を布団に埋めて、何も言いません。

レイの腕は細く、しかし先程の男以上に力強いものでした。

そして何より……恐くありませんでした……

不幸（後書き）

一人称に不自然さを感じます。

戦闘の描写と、エリーの心理描写は別にした方が良いですかね？

つまり戦闘〓三人称 エリー心〓一人称 みたいな感じです。

教えてください！

感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！

アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワンクリックしてくれると嬉しいです！

提案（前書き）

1日2話更新だと……書くのが楽しくて仕方がない！

提案

どうも、淫魔のエリザベスです。

不幸続きでめげそうですが、何とか生きています。

最近は、人間にも不器用だけど優しい方が居るのを知りました。やはり偏見や先入観だけで判断するのは良くないですね。

「なかなか良い家だな、鞆はどこに置く？」

「あ、その机の上をお願いします。ありがとうございます……」

家は一階にキッチンを備えたりリビングと客間、二階には自室と空き部屋が2つ。

一人暮らしには豪華すぎるものでした。

そしてレイ『さん』の家からすれば、一般市民の家のほとんどはあばら屋と変わらないでしょう。

「どうした、本当にしおらしくなったな？」

「だって命の恩人です。礼儀を欠いては淑女の名折れですから……」

「命って、大袈裟な……」

「私にとって純潔とは命と同位のようなものです……」

これまで守って来たのに、もし失ってしまえば、他の淫魔との違いが一つ減ってしまいます。

純潔であることは、『淫魔エリザベス』の象徴でもあるのです。

そして、もしレイさんが居なければ、それを守ることが出来ませんでした、故に彼は命の恩人なのです。

「す、すまん……」。

なんといつか、お前は淫魔らしくないな。変わっているというか、やはり他の淫魔とは違う」

私の表情に鬼気迫る感があったからでしょうか、少し引かれました。

「ほ、本当ですか？ どちら辺がですか？」

「そうだな……確かに誘惑をしたりと、ふしだらな印象はない。

だが、お前が言う通りに『淑女』を意識しているせいか、種族の特性も相まって独特な『妖艶さ』を醸し出しているような……」

「よ、妖艶さ……つまりそれは……え、エロですか?!」

「ぶっ！ だからもう少し包み隠してやんわりと言え！」

私としたことが、妙な言葉を……

しかしレイさんの言う事が確かなら、私の78年間やってきたことは、私の目指すものと反比例する結果を生み出していたということですか。

「ここが寝室みたいだな、よっと……」

寝室と思わしき部屋を見つけ、扉の前で立ち止まったレイさん。

扉のノブを捻るために屈んだのですが、依然私を抱きかかえたままであるため、不可抗力で私の顔と急接近。

「わ……」

近くで見ると、レイさんは意外に幼い顔立ちをしていました。

女の私から見ても、可愛いと思える顔立ちです。

でも、童顔と言う程でもなく、大人と少年の境目くらいでしょうか。まさに青年と言った風です。

「わわ……」

これまで男性に長時間体に触れられることも、こんなに近くに寄せられたことも無かったので、言葉も出ません。

「あ、すまん……ドアを開けようと思って」

「わ、分かっています……お気になさらず……」

命の恩人です。こんなことで一々怒っては、私自身の度量が知れるというものです。

羞恥で狼狽する私と対照的に、レイさんは精々頬を赤らめる程度です。

もしかしたら女性関係には慣れている方なのでしょうが。

「ん、じゃあ下さすぞ？」

「あ、はい。お願いします」

ベッドの前まで来たレイさんが、ゆっくりと私を下ろし、掛布団を掛けてくれる。

やはりこういう場面では、しっかりと紳士的な一面を垣間見せるのですね。

「あの、レイさん……？」

「ん、何だ？」

「レイさんは、女性との関係は豊富な方なんでしょうか？」

布団から首だけを出す私は、気になっていた事を聞いてみることにしました。

「何故そんなことを聞く」

「いえ……私を抱き運ぶのも、顔が近づいたりしても狼狽うろたえたりしなかったので、思い至ったのですが……」

しかしレイさんの答えは、意外なものでした。

「いや、女性関係に関しては無知だ。恋仲になったこともないし、女と話すのは仕事関係の人間くらいかだ。

ましてや個人的に話すとなると、使用人くらいだな」

「そ、そうなんですか？ その割には色々と慣れてらっしゃるようにお見受けしましたが……？」

「うむ、家訓で『女性には紳士的に対応せよ』と、幼少の頃に父に言われてな。先程までの対応も、俺の出来得る精一杯だ」

だとすれば、シャツ一枚しか着ていない女性が寝ている布団を剥いだ時点で、家訓を守っていないですね。とは言いません。

レイさんの言葉から考えるに、今まで女性と接する機会が極端に少なかったので、どう接すればいいか分からなかったのでしょうか。

人間界の騎士という役職は、女性関係には厳しいと耳にしますし、かくいう私も、男性とは親密になった経験がありませんから、他人の事をどうこう言うことは出来ません。

「……では改めてお礼を言わせてください。危ない所を助けて頂き、本当にありがとうございます。

レイさんのご好意を無碍にして、その結果、更に余計にお手を煩わしてしま

「ああ、もう良い。俺が好きでやったことだ、それにそこまで畏かしまらなくていい。本当にお前は悪魔、それに淫魔か？」

「……ありがとうございます。近いうちに、お礼をさせて頂きます」
流石にここまで言われれば、素直にご好意を受けるしかありません。
二度も好意を投げ捨てるのは、淑女としてやってはイケませんか
らね！

でももちろん、お礼を返すのも忘れません、淑女の常識です！

「別に良いんだがな……それよりお前は

「レイさん？」

「な、何だ？」

レイさんの言葉を途中で遮る私。

「失礼ですが、あまり『お前』と言われるのは好きではありません。
どうぞエリザベス……いえ、エリーとお呼びください」

「あー、分かった。では、エリー？」

「はい、何でしょう」

先程から感じていた違和感は、レイさんが私を『お前』と呼んで
いたからだったようです。

普段会話する人は、総じて私をエリーと呼ぶので、やはりこちら
の方が小気味も良いです。

「エリーはこの家に住むつもりなのか？」

「？ はい。というかもう住民登録は済ましていると思います。ど
うしてですか？」

「ああ、さっき襲われたことで分かったと思うが、この辺りはグラ
ベルの中でも治安の悪い地域だからな。

日中は多少はマシだが、日が沈むと『あの通り』だ」

グラベルとは、この国 都市 の名前です。
商業都市グラベルと呼ばれていて、大陸で最も商業や工業が繁栄している国です。

また都市面積の5分の1はなんらかの工業地で、常に熱した鉄などを打ちつける音が鳴り響くことと、常に商人たちの活気の良い声が止まないことから、『眠らない都市』との別称もあります。

しかし5分の1もの面積が工業地なのにも関わらず、残りの部分だけでも他の大国の倍以上の大きさがあります。

勿論、都市人口も他の追隨を許さない多さです。

また多種多様な武器を産出しているため、荒事を生業なりわいとする方々も多く滞在しています。

そんな荒くれたたちが問題を起こした時に抑えたり、国の治安維持や警備、有事の際の 他国からの侵略 防衛などの為に『国兵』と呼ばれる軍隊も存在します。

『国兵』と言うのはあくまで総称で、主にレイさんのような騎士などが当て嵌まります。

それとは別に、雇われて国に就く傭兵と呼ばれる冒険者さんたちもいるそうです。

ふう、事前に勉強していて正解です！

「まあ、つまり。可能であるならば、なるべく大通り近くに面した場所に引越すことを勧める。」

通りなら真夜中でも人もいるし、何より警備兵がいるしな。まあ

よっぽどの馬鹿意外はモメ事は起こさない」

「なるほど……」

「まあ……ここでも日中に移動するくらいなら、フードなんかで顔を隠せば問題ないだろう」

「フード……ですか？ それは必須ですか？」

「ああ。女、エリーならば尚更なほさら必須だろうな」

女性、それに渡しならば必要不可欠……？

数秒の間その意味を考えましたが、答えが出ませんでした。

「えっと、どういう意味でしょう？」

「………お前は自分の器量の良さに自覚はあるか？」

「あつ、また『お前』って言いましたね！」

「つまりい！ お前みたいな見目麗しい美少女が裏通りを闊歩かつぽしていたら、性欲を持て余したサルみたいな連中の恰好の獲物ってことだ、わかったか？！」

レイさんは呆れた顔で溜息を吐くと、人差し指を私のおでこに押し付けて、一息でそう言いました。

「それは……つまり強引に性交を強要されるということですか！」

「だからもう少し包み隠してやんわりと言えええい！」

「つ、唾が飛びました……」

「あ、ごめんなさい」

息を荒げたレイさんでしたが、私が不満を口にするとハンカチを取り出して顔を拭いてくれました。

息は荒いままで顔を拭いてくれたので、少し怖かったです。

「確かにレイさん言うように、私の容姿は……その、種族上の理由

で綺麗なのかもしれない。

ですが、早々に引越しをしようにも、『視察』の本部に連絡するにも時間がかかります。それに、そんな自分勝手な理由で余計なお金を掛けることも出来ないと思います……。

生活する分のお金は十分に支給されますが、『視察』するための過程で労働するつもりです。

ですから、その際に稼いで賃金で引越しようと思います……」

私自身もこんな危なっかしい場所で、最低でも6ヶ月 契約期間 を暮らしたくはありません。

幸い、賃金は全て引越しに回せますし、1、2ヶ月も働けば何とかなると思いますし。

「ふむ……エリー、少し提案があるのだが」

「はい、何でしょう？」

レイさんは少し逡巡した後、良い考えを思いついた子供のような表情を浮かべ、私に語りかけてきました。

「俺の屋敷に住まないか？ 幸い、部屋は腐るほどに余っているからな」

「え、ええ？！ それはイケませんよ、申し訳ないですしっ！」

「いいって、それに……」

「そ、それに……？」

「エリーに興味が湧いた。」

悪魔とは俺が討つべき存在だと言うのに、その悪魔と同居しようと思うなど、全く以て滑稽な話かもしれないけどな」

快活な笑みを浮かべるレイさん。

その表情には、仮にも悪魔である私に対する警戒などまるであり

ませんでした。

そもそも悪魔……それも精を絞り、男性の心を奪う淫魔である私に、同居を提案するなんて正気の沙汰ではありません。

「正気ですか、私は淫魔ですよ？ 私があなたから殺されるのを何とか免れるために口八丁を並び立てて、後に然るべき報復……つまり夜這いする可能性も無いわけではありません。

そんな私に同居の提案をするなんて」

「ふむ……では夜這いされたときは、後先考えずに楽しむとするさ」「な、何を言ってるんですか？！ そんなことするわけないでしょう？！」「

「はははっ！ やはりエリーならば大丈夫そうだ、気にせず屋敷に来い！」

再度、快活に大笑いするレイさん。

夜ですし、もう少しポリウムを落とさないとご近所の迷惑になつてしまいますよ。

そして私は、レイさんにはこの手の話題は逆効果であることを学んだのでした。

もう休ませてください……

提案（後書き）

一応、世界観の設定なども作っております。
次回辺りで、レイの身分的な物が分かるかも。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワン
クリックしてくれると嬉しいですよ！

都市紹介：グラベル（前書き）

三回更新……だと……？

都市紹介：グラベル

名前：商業都市国家グラベル Name：Commercial town state Gravel

大陸で最も商業が繁栄している都市。

都市面積の5分の1はなんらかの工業地で、常に熱した鉄などを打ちつける音が鳴り響くことと、商人たちの活気の良い声が止まないことから、眠らない都市とも言われている。

5分の1を工業地なのにも関わらず、残りの部分だけでも他の大国の倍ほど大きさがある。

工業地区からの騒音のため、グラベルの家々は防音構造の成された状態で建っている。と言っても、工業地区から居住区などは離れているので、大きな意味は成さない。

また、針から剣、斧、大刀と、多種多様な武具を産出しているため、商人だけではなく、刃物を使う職業も多く滞在している。

工芸品などのアーティファクトも多く、それらも国家資産の収入源になっている。

それに、その武具の種類が多さから、様々な職種の育成機関としての顔も持っている。

第二学区には戦闘技術や、戦場での指揮、兵法の教育などを主な学科とする学校も存在している。第一学区は一般的な教養を身に着けるための学校が存在する。

そして、各国には『冒険者』と呼ばれる者たちの機関『ギルド』が存在し、グラベルにも支社が無論ある。

ギルドは国民から王族まで、幅広い人間からの依頼を受ける。報酬の依頼は数割をギルドが得て、残りは依頼をこなした冒険者などが受け取る事になっている。

ギルドの得た報酬金額は、ギルドの資金にしたり、国への税に使われる。

冒険者とは別に、国を守る者を『国兵』といい、これは国の王族の命令により行動する兵隊だ。

『国兵』というのは国に就く兵士という意味での総称で、騎士や、王族の近衛兵や、一般兵、神殿兵、神殿騎士といった諸々の兵を含む。

国に雇用されて『傭兵』と呼ばれる冒険者たちもいる。

都市紹介：ケラベル（後書き）

またその内別の場所で、設定集などを作るかもしれない。
ここで紹介を入れると邪魔だ！という方がいらっしやれば言っ
てくださいな。

ご感想やお気に入り登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワ
ンクリックしてくれると嬉しいです！

承諾

どうも、淫魔のエリザベスです。

最近は……三人の悪漢によって貞操の危機に瀕している所を、レイさんによって助けられたり。

結局足腰立たなくなった私を、お姫様抱っこで家まで送ってもらい、その後レイさんが、治安の悪い地区に住む私の身を案じてくれて、『俺の屋敷に住まないか？』とお誘いを受けたりしていました。

「どうでしょうか……」

レイさんに家まで送ってもらった夜の翌日、漸く体が動くようになった私は、リビングで紅茶を飲みながら、昨晚のレイさんからの提案について考えていました。

提案を『申し訳ないです！』と、頑なに断りつづけていた私でしたが、レイさんは『そうだ、ならばこうしよう』と何かを閃き、私に幾つかの条件を提示しました。

レイさんの言う条件はこのようなものでした。

『屋敷の一部屋を貸す代わりに、部屋の掃除や管理は自分ですること』

当然です。私とて借りる立場になれば、そのくらいはしないと申し訳がたちません。

『俺が使用人に頼んでいるのは、屋敷の掃除や管理のみだ。炊事洗濯などの、俺の身のことは頼んでいない。端的に言えば料理を作

ってくれ、もう加工食品は飽きた』

これも、料理くらいならば大した手間もありませんし、問題ありません。

自分の一人の分が、二人分に増えるだけですものね。

ただ、最後の一つが……

『俺の右腕になってくれ』

もちろん、物理的な意味ではありません。

私も右腕一本を犠牲にしてまで、レイさんの屋敷に住みたいとは思いません。

この話をした時に、レイさんが私に改めて自己紹介をしてくれました。

何を隠そう。レイさんはこの国の『魔法騎士団』の団長らしいです。

何でも新生の団らしく、比較的若い、そして有能な騎士を募って作り上げた団と書いていました。

レイさんは18歳になったばかりだそうです、名のある貴族の生まれで、尚且つレイさんの実力も折り紙付きらしく、王様からお声が掛かったそうです。

つまり。レイさんの言う右腕とは、仕事上での補佐的な意味を示すようです。

仮にも悪魔ですので、多少の戦闘をこなすことも出来ますし、事務仕事でしたら魔界に居る頃からやっついて慣れていきます。

お給金も貰えるようですし、良いことづくめであることは確かです。

確かなのですが……

「男性と同じ屋根の下、共に暮らすと言うのは如何なものでしょう……夜になると使用人の方も居なくなるようですし……」

迷います。

レイさんは命の恩人で良い方ですが、やはり男性と同居と言うのは……。

正直な事を申し上げますと、実は私は『男性恐怖症』です。昨晩のように、男性に性的な暴力を受けそうになったことも一度や二度ではありません。

私が何度も転勤を繰り返している理由がそれです。でも、他の男性に比べるとレイさんは格段に優しく、素晴らしい御人ですし、暖かい人ですし……

「はあ、いくら考えてもキリがありません……。と、というか、どうして私はレイさんの事ばかりを基準に考えているのでしょうか……?」

そうです。

今私が悩むべきは、男性と同居することを私が良しとするかしないかです。

……いやいや。でもやっぱり同居するとなると、優しくて信頼出来るような方が良いのは事実です。

同居人も重要なポイントの一つですね。

その点レイさんは、女心を知らないところもありますけど、騎士道精神的にも彼の紳士さを見ても信頼は出来そうです。

というか、私に女心云々を言う資格は無いですね、私も男心が分かりませんし。

「もうすぐお昼を過ぎてしまいますね……」

「昨晚レイさんは『明日の昼頃にまた来る』と言って帰っていきま
した。」

「レイさんが時間にルーズな人でなければ、もうそろそろ家に来る
頃でしょう。」

「それなのに……まだ答えが決まっています……。」「
そう言えば、男性を自分の家に入れたのは初めてでしたね」

人間界に来てから、初めての事ばかりです。

「せっかく来てくれて、何も出さないのは失礼ですね。レイさんは
紅茶は飲めるんでしょうか……？」

「思い至った私は、椅子から立ち上がり手慣れた手つきで新たな紅
茶の準備を始めます。」

「魔界に居た頃は遊ぶ友人も居なかったので、家の中で出来るイン
ドア派の趣味を多く持っていました。」

「紅茶を入れることが出来るのも、その名残です。」

「男の人は、砂糖は入れないんでしょうか……？」

「偏見でしょうか？ とりあえず、机の上に角砂糖を置いておきま
す。」

「丁度お湯も入れ終わり、準備が出来た頃に、見計らったとも思え
るタイミングで玄関を叩く音が響き渡ります。」

「エリー、俺だ」

「あ、はい。今開けますね！」

待たせる訳にもいきません、素早く玄関戸を開けます。
戸を開けた私を見たレイさんは、驚き寄りの表情を浮かべていました。

「その恰好はまさか？」

「はい元の姿です。人目ありませんし、それにレイさんには淫魔だつてバレてますもん」

「それはそうだが……な、なんというか、中々に前衛的で色香漂う恰好だな……！」

「ええ?! そ、そうでしょうか……?」

レイさんに言われて、自身の体を見下ろします。

人型の時のような服装ではなく、魔力で構成されている淫魔の一般的な服装です。

とは言え、流石に他の淫魔と同じ服装だと、肌の露出面積が多過ぎるので、私は肌は最低限しか曝^{ひら}けていないはずなのですが……。

「ですがこれで前衛的ならば、他の淫魔たちの恰好は時代を先取りしているレベルだと思いますよ？」

それに肌も露出も少ないと思うんですが……?」

「確かに露出は少ないが……何と云うか服がピッタリとしすぎていて、その、か、体の線が……」

言われて気付きましたが、確かにピッタリとしているかもしれない。
せん。

魔界は人間界に比べて寒いので、いつも外套などのコートを着ていたので気にしたことはありませんでした。

肌の露出を無くすことばかり意識していたせいで、他の部分が完全に疎^そかになっていました……。

さらに、レイさんに言われたせいで、妙に恥ずかしくなってきた。

普段は当たり前と思っていたのに、急に根底の部分を覆されたせいで、羞恥も倍です。

「あ、あのー。出来ればあまり見ないでください……」

「す、すまん！ これ、使っていていいぞ」

胸元やらを隠し、羽織るものを探しだした私に、レイさんは一つ謝罪を述べると、自分の上着を差し出してくれました。

それを断るには、羞恥の力が強すぎて無理でした。有り難くお借り致します。

「と、とにかく上がってください！ レイさんは紅茶は飲めますか？」

気を取り直して声を張り上げた私に、レイさんは頷く事で返事をしました。

椅子に座り紅茶を差し出すと、お互いに言葉も無く、しばらくはティータイムを堪能しました。

………私には少し重苦しい空気でありましたが。

「で、どうする、もう決めたのか？」

お茶を飲み終え、私が片付けを済まして椅子に座り直すと、レイ

さんから話を切り出しました。

「……まだ、少し悩んでいます」

「ふむ……何に対して悩んでいるのかは教えてくれるか？」

「やはり、男性と同じ屋敷に住むのは抵抗があると言いますか……それに夜には二人きりになるのでしょうか？」

「初心つひな淫魔も居たもんだな……」

「すみません……」

実際、それで踏ん切りが着いていないのですから、言い返せません。

かと言って。今のこの家で暮らしたいわけも無いですし、実質答えは決まっているようなものなのですが、それでも首を縦に振るのには勇気が要ります。

「やっぱり、男の人は……怖い、ので……」

「……それは昨日の一件が原因か？」

「いいえ、人間界に来るずっと前からです。

向こうで仕事をしている時にも、何度か男性に……襲われそうになった事があったので……。

触れられるのは怖いですし、近寄られるのだって怖いです」

レイさんが、昨晚私を抱き抱えたことでも思い出したのか、表情を悲しそうに曇らせる。

そんなレイさんを見て、何故かとても酷いことをしたような気分になりました。

……決意します。

「でも……でも、レイさんは他の男性とは違う気がします。昨日抱っこされた時も、怖くなかったです。なんだか……あったかかった

です。だから……」

「……………」

「お家にお邪魔させてもらっても良いでしょうか？」

レイは、呆気にとられた顔をしています。

それもそのはずですよ。話の流れからして、断る雰囲気を出していたと、自分でも思います。

「人間と悪魔だと、文化の違いもあると思います。

ですので、その点はご指導のほどよろしくおねがいますね」

まあ、初めてばかりのことです。

今更新しいことが増えたところで、大きな変化はないでしょう。

それに、自分自身の成長（男性恐怖症の克服を含め）にもなると思います。

うん！ レイさんですし、大丈夫ですよ。

承諾（後書き）

ちよつと短めかな？

ご感想やお気に入りに登録してもらえると、励みになります！
アルファポリスのランキングにも参加しているので、ポチッとワン
クリックしてくれると嬉しいですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5619y/>

淫乱じゃない淑女な淫魔の日々

2011年11月21日23時26分発行